

「私が博士課程で得たもの」

東京大学大学院知能機械情報学専攻
西本 和生

本稿を読む方の多くは、すでに博士号をお持ちで内容の多くはご存じかもしれない。それでも私がこのタイトルのエッセイを選んだのは、この4年間での自身の変化を言語化してみようと思ったからである。しかし、博士課程の道のりは一人として同じものではなく、まさに十人十色である。それもまた博士課程の魅力だと感じている。本稿を通じて、「このような気づきや学びもあるのか」と感じていただければ幸いである。

私は、大阪大学、同大学院にて学士、修士を取得した。そこでは主に、お酒造りなどに関わる発酵を通じて生物工学を学び、その中で生物の持つ能力に魅せられ、博士課程進学を志した。せっかくならば、ラボを変えて新しいことを学ぼうという思いから、東京大学大学院の現所属で博士後期課程を始めた。博士後期課程を始めてから1年ほどで感じたのは、「無理にでもやってみれば、人は上達する」ということである。所属ラボは、国内学会のみならず海外学会への参加も推奨しており、小さな成果でも形にして発表する文化があった。最初のうちは、図のクオリティも内容も散々であったが、回数を重ねるうちに、新しい装置の使い方、データ処理の方法、イラスト作成ソフトの使用方法などをその都度学んでいった。振り返ってみると、少なくとも図の出来栄は格段に向上し、申請書の採択などにもつながったと感じている。研究成果そのものがまだ不十分であっても、チャンスがあるなら積極的に挑戦し、成果を発表する場に身を置くことは非常に有意義であった。一方で、私にまだ足りていないのは、研究成果を学術誌としてまとめ上げる力である。ある先生の言葉に、“Interesting and unpublished is equivalent to non-existent.” (George M. Whitesides, Adv. Mater., 2004) というものがある。私の場合、学会発表止まりで、学術誌へまとめきれなかったことが多い。今後の課題である。

2年目から3年目は、海外経験を積む時間であった。博士課程に進学する理由の1つとして、「世界の人々と協働できる人」になりたいと思っていた。実際に3回の国際学会や海外ワークショップに参加し、語学力やコミュニケーション能力を磨いた。その後、米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校で1年間の研究留学経験を積んだ。この1年間は自分の人生を最も大きく変えた1年であると言っても過言ではない。文化も考え方も、食事も違う環境で過ごす日々というのは非常に新鮮な体験であった。と同時に、どうすればその環境に適応して、そこのメンバーと充実した日々を過ごせるのかを模索する日々でもあった。振り返ると、「信頼の獲得」と「食を共にすること」が重要だったように思う。最初グループに入った時、おそらく周りから、こいつは本当に仕事をするやつなのか？とみられていたのだと思う。入りたての時には表面的な会話しかなかったが、自分が研究に積極的に取り組む人間だと認識され

てから(2週間に1回のラボミーティングでは小さなデータでも必ず発表した)は、実験がうまくいかない時に声をかけてくれるようになった。おかげで成果が出ただけでなく、学会参加や論文投稿の費用をラボに支援していただいた。また、誘われたランチや飲み会には必ず出た。そこでは日本食との違いの話から、週末には何をしているのか等々、食事の場はコミュニケーションの機会であり、人の本音をお互いに知る場としても良い環境であると肌で感じた。言語能力をはじめ、そのような多様な環境に若く自由なうちに身を置けることも、博士課程の大きな魅力ではないかと思う。将来世界で働きたいと思う人には、博士進学を勧めたい。

4年目では「忍耐力」を得た。この力は博士課程を経験した多くの人に共通して培われる力の一つではないだろうか。私の場合、特に予備審査前の3か月でその力が鍛えられた。私が研究している内容は、生物工学、特に有用細胞のスクリーニングに関する研究である。生き物を扱っていることもあり、再現性をとるのに非常に時間を要した。前回の実験と違うデータが出て絶望し、何が違ったのかを確かめるために実験の詳細や培養時間などを見直して再現性が得られる段階に辿り着くまで、非常に精神的に追い詰められたものである。先行研究調べ、文章の執筆も同様に途方もない仕事量であった。では、なぜそのような辛い時期を乗り越えられたのか。正直、今の時点ではまだうまく言語化できない。ただ一つ確実に言えるのは、支えてくれた家族、友人、恋人の存在がなければ、あの時期を乗り越えることはできなかったということである。当時の自分のどのような行動がその後の結果を左右したのかについては、数年後に改めて振り返って考えてみたい。

以上、ここでは主に「とにかく数を重ねて上達すること」「世界の人と働ける能力」「忍耐力」の3つを紹介した。これら全てを総合すると、自分なりの研究者としての「スタンス(姿勢)」が少しずつ形づくられてきたのだと感じている。今後は、ここで培ったスタンスを土台として、研究者としてのキャリアを積んでいきたい。